

2 こがんと。

広報こが

昭

隅

— 隅を照らす —

by



中村哲 医師

アフガンは私にとっての「隅」

アフガニスタン東部ジャララバードで12月4日朝、NGOPMS(平和医療団・日本)総院長・「ペシワール会」現地代表、医師の中村哲さんが亡くなった。灌漑工事の現場に向かう途中だった。

中村さんは、戦乱と干ばつで荒廃したアフガニスタンやパキスタンで35年にわたり医療活動や灌漑事業を行ってきた。

水不足が原因で子どもの栄養失調や赤痢、コレラなどの感染症が急増し、目の前で幼い子どもたちが次々と命を落とした。飢えや渴きは医療では治せない。清潔な水と農業用水が必要だ。

「1000の診療所より1つの用水路を」その思いが2002年の「緑の大地計画」立案につながった。

医療活動の一方、自ら設計図を引き、重機を操り用水路建設に取り組んだ。

中村さんは一年前、現地スタッフに伝えたという「私が死んだら、骨は緑に生まれ変わったガンベリ砂漠に埋めてほしい」

アフガンの人々が安心して暮らせることを望み砂漠に水と食糧をもたらした35年間。まだまだ続くはずの道のり。無念であつたろう。

失った存在はあまりにも大きく、その影響は計り知れない。亡くなって一夜明けた5日、母校の古賀西小学校では全校児童が敬愛する先輩に黙とうをささげた。

中村哲さんとともに命を奪われた5名の方々
ザイヌッラー・モーサムさん
ジユマ・グルさん
マンドザイさん
サイド・ラヒムさん
アブドル・ウドゥスさん

謹んでご冥福をお祈りいたします。

朝倉市の治水設備「山田堰」という伝統工法をモデルにこれまで総面積1万6500ヘクタールの農地と約65万人に水の恵みをもたらした。乾いた大地に「命の水」が送られ、たくさんの命が救われた。

「武器ではなく命の水を」戦争や干ばつで色を失い荒廃した砂漠は、緑の農地に変わった。

写真：緑に変わったガンベリ砂漠を背にほほ笑む中村哲さん

駐日アフガニスタン大使館は 中村哲医師への思いをホームページに掲載した

私達は、中村哲医師が乗っていた車が狙撃兵によりナンガラハル州で狙い撃ちにあり、病院で亡くなられたニュースを聞き、大変悲しみに包まれています。中村医師のボディーガードと運転手を含む5人が亡くなりました。

中村医師はアフガニスタンの偉大な友人であり、その生涯をアフガニスタンの国民の生活を変えるためにささげてくださいました。彼の献身と不断の努力により、灌漑システムが改善され、アフガニスタン東部の伝統的農業が変わりました。

アフガニスタン国民と政府は中村医師の功績に敬意を表し、ご家族、同僚の皆様、ご友人、そして日本国民の皆様にご追悼申し上げます。

〈アフガニスタン大使館ホームページより〉

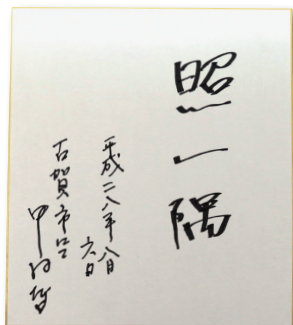
〈中村哲さんの遺した言葉〉

●2016年古賀市で講演をされたとき、担当した職員の心に残った言葉。
「作業中、重機に乗っていっぶくをしながら、ふっと死ねたらいいな」
中村さんの心は常にアフガンにあった。

●活動を続ける理由をたずねると「神様によく思われたいんでしょうね」と笑った。

●診療で患者にがんが見つかった時、「私は告知をしないかもしれない。治療のために子どもを売るかもしれないから。それほど過酷な生活なんです。家族そろって親を看取るほうが幸せなのでは、と思うんですよ。」

●「照一隅(一隅を照らす)」
中村さんが、訪れた先々で色紙に書いた言葉。「私にとっての一隅はアフガンだった。世界中の人がそれぞれの隅を見つけて、その隅を照らせば(世のため人のためになるよう努力実行する)、世界中が照らされる。それが、きっと世界平和につながる。」



ペシワール会

〒810-0003
福岡市中央区春吉1-16-8
VEGA天神南 601
☎ 731-2372 (9時～18時)
FAX 731-2373
✉ peshawar@kkh.biglobe.ne.jp
🌐 http://www.peshawar-pms.com

中村哲さんの足跡

1946年(昭和21年) 福岡県に生まれる 古賀西小学校卒業。その後西南学院中学校、福岡高校卒業 九州大学医学部卒業、その後国内の病院で勤務	1983年(昭和58年) 中村哲さんの医療活動を日本から支援するためペシワール会設立	1991年(平成3年) アフガニスタンに最初の診療所を開設	1998年(平成10年) ペシワールに恒久的な拠点となるPMS基地病院開設	2000年(平成12年) アフガン全土で干ばつが深刻化。水不足が原因で子どもの栄養失調や赤痢、コレラなどの感染症が急増した。「飢えや渴きは医療では治せない。清潔な水と食糧が必要」	2001年(平成13年) 「アフガンのいのちの基金」を設立し、避難民へ緊急食糧配給を実施	2002年(平成14年) 干ばつで荒れた農村の復興をめざす「緑の大地計画」を立案	2003年(平成15年) 「1000の診療所より1本の用水路を」とアフガンで用水路建設を開始	2006年(平成18年) 母校の古賀西小学校で子どもたちに水路づくり体験を指導(NHK「よこそ先輩」放映)	2016年(平成28年) アジアのノーベル賞と呼ばれ、アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を果たした個人や団体に贈られるマグサイサイ賞を受賞	2018年(平成30年) 母校の古賀西小学校で子どもたちに水路づくり体験を指導(NHK「よこそ先輩」放映)	2019年(令和元年) 中村さんにもらったスケッチブックに「ありがとう」をしっかりと書いた。小山佳菜子さんのメモ(当時古賀西小6年生)	2019年(令和元年) 10月7日 アフガニスタンでの長年の活動が評価され大統領から市民証(名誉市民権)を授与 12月4日 襲撃され死亡 12月27日 旭日小綬章受章	2019年(令和元年) 古賀西小での募金活動 遺志(思い)はしっかりと受け継がれている。	2019年(令和元年) 古賀西小での募金活動 遺志(思い)はしっかりと受け継がれている。	2019年(令和元年) 古賀西小での募金活動 遺志(思い)はしっかりと受け継がれている。
--	--	---	---	---	--	--	--	---	---	---	---	---	--	--	--

中村哲さんを招いての人権講演会を開催して



2016（平成28）年8月6日、広島に原子爆弾が投下されてから71年目のその日、古賀市社会「同和」教育推進協議会と古賀市学校人権教育研究協議会の共催で、2016（平成28）年度第1回目の“みんなの人権セミナー”が開催された。

講師には、1984（昭和59）年からパキスタンやアフガニスタンの地で、医師として、時には土木作業員として、現地の人たちのために汗を流し続けておられる中村哲さんをお招きし、「今、平和を考える」という演題でご講演いただいた。この年の9月には70歳を迎えようとしていた中村さんであったが、元気に壇上に立たれ、ユーモアも交えつつ、戦と飢餓で苦しむ国の中で体験し考えられた「平和」とは何かについて語っていただいた。

現地では医師として活動を開始されたが、次から次に亡くなっていく若い命を目の当たりにし、「100の診療所より1本の用水路」こそ多くの命を救えると確信された中村さんは、それから井戸や水路の建設に力を注がれることとなったそうだ。

2003（平成15）年から始まった「緑の大地計画」は、荒涼とした田畑や砂漠を豊かな農地に転換しようとするものだった。わずか数年後の緑豊かな大地の様子がスクリーンに映し出されたとき、館内の聴衆からどよめきが起ったのを今でも鮮明に覚えている。日本から遥か6,000km離れたアフガニスタンの地で中村さんは、日本との文化や習慣の違いに対し一切口を挟まなかった。人は時に、“違い”を善悪に振り分けがちで、それがお互いの距離を遠ざける要因になってしまう。まずは相手のことを理解することが重要なのだと体験から学ばれた一人の人間の良心は、誰も想像だにしなかったことを実現してみせたのである。



講演の最後に中村さんは、「私たち人間は、自然との関係を見つめなおす時期に来了。」「いかにして自然と折り合い、人と人とが折り合っていくか、その道を探っていく限り、私たちに将来はない。」と結ばれた。「平和」や「自然」に恵まれていることを“あたりまえ”だと思っている私たちに一石を投じられた中村さんの言葉を忘れず、私たちは今一度考え、行動していかなければならない。

残念なことに、この先私たちは、もう二度と中村哲さんから直接お話を聞くことは叶わないけれど、彼が私たちに示された、人間としての生き方が、それぞれの人に与えた影響は決して小さくないはずである。

心からご冥福をお祈りします。合掌

中村 哲さん 追悼パネル展

中村 哲さんの軌跡 ～その志を未来につなぐ～

◆～2月3日(月) 8時30分～17時

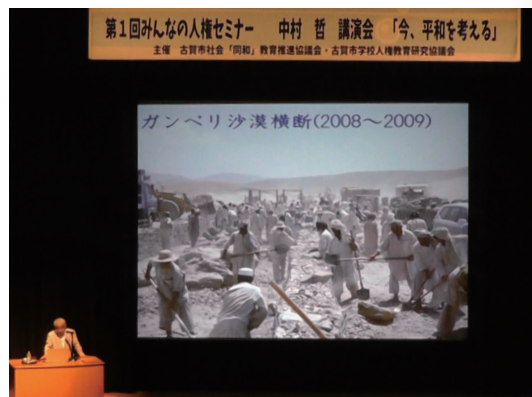
市役所市民ホール

◆2月4日(火)～12日(水) 9時～22時

リーパスフォーラム

市ホームページに「広報こがまち1997年9月号／中村 哲さん特集」を掲載しています。

<https://www.city.koga.fukuoka.jp/news/d/3679>



【問い合わせ】 人権センターWith(ウィズ) ☎942-1128